

# 「北国街道」を活かした 広域連携の推進

## 城下町金沢の特長と まちづくり

金沢のまちは、1583（天正11）年の前田利家入城以後、藩政

期の約280年間、加賀百万石の城下町として、14代の藩主により守られてきた。藩主の前田家は戦を避け、むしろ学術・文化を尊重してきたこともあり、5代藩主綱紀（1643年～1724年）の時代には、金沢の文化の礎が築かれたと言われている。その後、明治期以後に

かなざわ  
金沢市長（石川県）

やまのゆきよし  
山野之義



と寺院群、長町武家屋敷群などの歴史的なまちなみが良好に残っている（図1）。さらに、伝統文化や工芸が今も市民生活に息づいており、歴史文化資産と一体となった独特の文化的景観を形成している。

期の約280年間、加賀百万石の城下町として、14代の藩主により守られてきた。藩主の前田家は戦を避け、むしろ学術・文化を尊重してきたこともあり、5代藩主綱紀（1643年～1724年）の時代には、金沢の文化の礎が築かれたと言われている。その後、明治期以後に



図1 金沢の歴史文化資産群



図2 保存と開発の調和

金沢市は、歴史に責任を負うま  
ちとして、「保存と開発の調和」を  
コンセプトにまちづくりを進め  
てきた。金沢城公園や兼六園をは  
じめとした歴史文化資産が多く  
残る区域（図2の青色ゾーン）で  
は、これらと調和した伝統的なま  
ちなみ形成を図る一方、開発を優  
先する都心軸沿道区域（図2の赤  
線）では商業・業務機能を線的に  
集積させ、高層建築物の立地を認  
めるなど、保存と開発の調和を図  
るためのきめ細やかな基準や  
ゾーニングにより、土地利用や景  
観を誘導している。

## 北国街道筋に残る 歴史的風致

北国街道の加賀国内での道程距離は、越前国境より越中国境まで



下口往還の松並木

18里35町52間(約74km)であった。加賀藩では、幕府の政策に従い、主な道路の左右に松を植えていたこともあり、松並木路として永く親しまれてきた。本市内において当時の面影を伝える風景は数少ないが、市北部の北森本町内には、下口往還の松並木が今でも残るほか、街道筋には、町家がよく残っているなど、当時の趣を随所に感ずることができる。

本市では、この町家の保全に特に力を入れており、建築基準法が施行された昭和25年以前に建築された寺社以外の木造建築物を「金澤町家」と定義し、金澤町家条例の制定や助成制度の創設など金澤町家の保全活用に向けた施策を展開してきた。さらに本年度、数あ



石川中央都市圏連携協約締結式

る金澤町家の中でも、特に保全および活用の必要がある金澤町家を「特定金澤町家」として登録し、登録プレートの交付や補助制度の上限額の上乗せ等を実施し、所有者の保存へのさらなる意識醸成を図るなど、保全活用に向けた施策により一層力を入れている。

**北国街道を活かした  
広域連携事業**

平成28年3月28日、本市を含む4市2町(白山市、かほく市、野々市市、津幡町、内灘町、金沢市)

## 北国街道

**一口メモ**

彦根を起点に琵琶湖に沿って北上し加賀・金沢に向かう北国街道は、北陸道とも呼ばれた。北国街道は、金沢からさらに越中、越後まで続いており、彦根から金沢までの道を特に加賀路と呼んだ。北国街道を往来した加賀藩前田家の参勤交代は大名家の中で最大規模を誇り、供の数は二千人を超えたとされる。北国街道の道筋の各所には、景観づくりや旅人の雪除けのために植えられた松並木が今も残る。

**加賀百万石の栄華を支えた日本海側の要路**

企画協力…全国街道交流会議「街道交流首長会」

が連携中枢都市制度に基づき、協約を締結し、石川中央都市圏を形成した。

「石川中央都市圏」は、日本海や白山、河北潟等豊かな自然環境に恵まれるほか、加賀百万石の歴史文化が色濃く残るとともに、高等教育機関が集積するなど、全国に誇るべき独自の地域資源を有しており、これまで、このような個性や強みを活かしながら、多様な分野の連携に取り組んできた。

加えて、今秋には、石川中央都市圏で歴史的結びつきが深い北国街道に光を当て、地域資源の魅力向上と、4市2町の連携、交流の促進を図るため、住民参加の探訪会を構成市町で連携して開催することとした。本年は、初めての開催ということもあり、バスを利用して都市圏内を巡ることにしているが、次年度以降は、地域を限定し徒歩で巡る予定であり、継続して実施することとしている。